

林業技術センター
普及班便り
(第40回)

いわての林業人19

はじめに

今月の普及班便りでは、北部産業株式会社の新田製炭所（洋野町大野）で、若き炭焼き人として活躍する兼田一洋さんをご紹介します。

入社のかきつけ

元々、実家も炭焼きをしており、木炭には馴染みのあった兼田さん。知人を現在の職場に訪ねた時に、その知人から誘われたことが入社のかき



炭窯の前で

かけとなりました。それ以来10年間、炭焼き一筋で、職場の先輩達に教えられながら、精進してきました。

仕事の様子

「体を動かすことが好き。」と語る兼田さん。取材当日も、原木選別、割材、運搬といった作業を、要領良くこなしていました。薪割り機のクサビを原木の芯にビタリと入れるワザが光ります。窯周辺の作業が一段落すると、今度は木炭の切断。梱包に備えて、焼き上がった長炭を丸鋸盤で切っていく作業ですが、先輩のお姉様方に教えられながら？こちらでも手際良く切り揃えていました。



木割も鮮やかに

現在、炭材の立て込みから出炭まで、一連の作業をこなす兼田さんですが、始めた当初は原木の樹種を見分けるのに苦労したとのこと。ナラ以外の丸太を窯場に積む度に、その木を先輩に「はじかれ」て、体で覚えたそうです。

仕事への取り組み

兼田さんにモットーを尋ねると、「日々の仕事をきちんとこなす。プロとして、品質の安定した炭を焼けるように心がけている。」とのこと。自宅の窯でも、会社の窯で覚えた技術を試すなど、工夫を欠かしません。また、4年前から、自分が焼いた炭



後輩の畑さんと

を岩手県木炭品評会に出品しており、最近では優秀賞を受賞しています。自宅で一緒に炭を焼くというお父さんも喜んだことでしょうか。

まわりの人達と

窯長の新田さんは、「まだまだ伸びる。その為には、とにかく自分の頭で考え、工夫をすること。」と、将来を楽しみにしているようです。

また、岩手県木炭協会の千田課長も、「最近、彼のように意欲のある若い生産者が増えてきた。他の若手と一緒に、岩手の木炭を引っ張って欲しい。」と期待を寄せます。さらに、今年の8月、職場に若い新人の畑さんが入りました。兼田さんも仕事を教えており、「他人にものを教えることは難しい。」と語りますが、畑さんは「色々教えてもらい、お世話になっていきます。」と、先輩を頼りにしているようでした。

おわりに

「休みの日には家族サービス」と語る兼田さん。これからも頑張っって良い炭を焼き、「岩手」日本一の炭焼きを目指してください。

林業技術センター普及班

019(698)1337